

修 士 論 文 要 旨

看護学専攻	在宅看護学 分野	学籍番号 221606 氏 名 田中 享子
論文題目	ホルモン療法を受けた閉経前乳がんサバイバーの思い	
キーワード	乳がん ホルモン療法 閉経前 がんサバイバー ライフイベント	
<p>＜研究背景＞</p> <p>日本での女性がんの部位別罹患率は、乳がんが第1位で、発症年齢は30～39歳に急激に多くなる。乳がん患者全体の70～80%はホルモン受容体陽性者でホルモン療法の適応者は多い。そして、ホルモン療法は5～10年実施される。閉経前乳がんサバイバーは、子育て、仕事などのライフイベントを考える時期と治療が重なる。この時期に、長期間のホルモン療法を行うことはライフスタイルに大きな変化が生じ、閉経前特有の悩みや不安、多くの問題を抱えると予測する。</p> <p>＜研究目的＞</p> <p>ホルモン療法を受けた閉経前乳がんサバイバーを対象として、ホルモン療法をおこないながら治療生活を過ごす思いについてインタビューを行い、その思いを明らかにすることを目的とした。</p> <p>＜研究方法＞</p> <p>閉経前にホルモン療法を実施した閉経前乳がんサバイバー7名を対象として半構造化インタビューによる質的帰納的研究とした。作成された逐語録から、ホルモン療法に対する思いに関する内容を文脈単位で抽出し、文脈の意味を損なわないように、コード化を行い、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出し命名した。分析過程では、分析の妥当性確保のために指導教員の指導を受けた。本研究は、三重県立看護大学研究倫理審査会の承認を得て実施した。（通知書番号：202804）</p> <p>＜結果＞</p> <p>分析した結果、545のコード、52のサブカテゴリーから、【がんは受け入れ難い】【がんを克服したい】【治療を受けることへの葛藤】【化学療法より利点が多くてありがたい】【治療継続は再発予防に大切と感受】【更年期様症状が少なく安心】【更年期様症状に対処し前向きな気持ち】【更年期様症状は多様でいくつも重なり辛い】【更年期様症状で女性性の喪失感】【更年期様症状で負担をかけた家族に心が咎める】【更年期様症状について相談できない辛さ】【信頼できる医療者の存在は安心】【同じ立場の人との思いの共有で心安らぐ】【周囲や家族の理解と支援がありがたい】【治療中の家事・育児に対する支援は意味がある】【長期的治療費で経済的負担が心配】【長期的治療費に対して社会からの支援が得られてよかった】【治療が終了したことへの安心感】【治療後も続く症状と再発への不安】の19カテゴリーが得られた。</p> <p>＜考察＞</p> <p>ホルモン療法を受けた閉経前乳がんサバイバーは、更年期様症状の程度によって様々な思いを抱えていた。また、周囲の支援に感謝の思いやサポート体制に安心感を持っていた。本研究では、更年期様症状が強い場合、ライフイベントに伴う苦痛や不安で、能力の低下、母親役割の危機、女性性の喪失、職場での役割遂行が不十分と感ずることなどから自尊心の低下を生じていた。そして、その辛い気持ちを表出できず一人で抱え込む傾向にあった。対象者が、更年期様症状について悩む思いを理解して欲しい思いや相談先を求める思いを持つことが明らかとなった。また、治療終了後は達成感と今後の不安も抱えていた。</p>		